

ブドウ主要病害の特徴と今後の防除対策

ブドウの晩腐病、べと病および褐斑病の生育期間中の発生を抑制するため、落葉処理や巻きひげの除去等、病害の発生しにくい圃場環境の整備に努めるとともに、休眠期の薬剤による防除を実施しましょう。

1. 晩腐病

例年8月頃から発生が見られ、収穫期にかけて増加する。本年は8月上旬まで発生を認めず、8月下旬に発生を認めたが、平年並であった。

症状 果実表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ(写真1)、果皮にしわがよってミイラ化する。

感染経路 病原菌は結果母枝等に潜在的に感染しており、5～7月頃に降雨により果実に伝搬され、その後の酸度低下・糖度の高まりとともに発病する。

防除対策 ◇病原菌の越冬場所となる結果母枝、巻きひげ、果梗の切り残し等を剪定時に取り除き、適切に処分する。

◇本年多発した圃場では、次年度も多発する可能性があるため、発芽前の休眠期防除および開花直前から大豆粒大期までの予防散布に重点を置く。

◇傘かけや袋かけを行う。例年発生が問題となる圃場では雨よけ施設の導入を検討する。

2. べと病

例年6月頃から発生する。本年は9月上旬まで発生を認めず、9月下旬に発生を認めたが、平年並であった。

症状 若葉では緑色が薄れた病斑、成葉では葉脈に囲まれた角型の黄色病斑を形成し、葉裏には毛足の長い白いかびが密生する(写真2)。果穂に発病すると果実の肥大が停止する。

感染経路 病原菌は被害葉の組織内で越冬し、5月の展葉期ごろから雨水や風で葉に到達する。発病後は葉裏の白いかびから2次伝染を繰り返す。

防除対策 落葉は翌年の伝染源となるため、集めて適正に処理する。

3. 褐斑病

例年5～6月頃と初秋に雨が多いと発生が多い。本年は7月上旬まで発生を認めず、7月下旬に発生を認めたが、平年並であった。

症状 葉に黒褐色の病斑を生じ、表裏に黒ずんだかびが見られる(写真3)。発病が激しいと早期に黄化落葉し、果房の着色不良や糖度低下を招く。

感染経路 病原菌は、結果母枝や枝の粗皮、落葉に付着して越冬する。これらが開花期ごろから風雨によって飛散し、伝染源となる。

防除対策 落葉は翌年の伝染源となるため、集めて適正に処理するとともに、結果母枝等は剪定時に取り除き、適切に処分する。



写真1 晩腐病による被害果



写真2 べと病による被害葉



写真3 褐斑病による被害葉